

## 訓読『平家打聞』(四) (巻九～巻十二)

### 中世文学輪読会

はじめに

本誌34・36・37号に引き続き、島原松平文庫本『平家打聞』巻九～巻十二の試訓を提示する。大方の御批正、御教示をお願いする次第である。

凡例(追加)

○底本巻六～巻十二については、黒田 彰氏「島原松平本『平家打聞』(影印・下)」(『愛知県立大学文学部論集(国文学科編)』36 昭63・2)によった。(前回の「凡例」として挙げるべきところ、抜け落ちたことをおわび申し上げる。)

○今回掲載分に対応する依拠・関連資料は次のとおりである。

巻十一「七難」注↓「仁王般若波羅蜜經」受持品第七

巻十二「北野天神」注↓荏柄天神社本「北野天神御傳 御託宣

等」(引用の際は、(北)と略記した。)

同「本院大臣」注↓「神道集」卷三一九「鹿嶋大明神事」

(引用に際して、「仁王般若波羅蜜經」は大正新修大藏經、「北野天神御傳 御託宣等」は「神道大系 神社編 北野」、「神道集」は角川貴重古典籍叢刊「赤木文庫本神道集」に、それぞれ拠った。)

○「平家打聞」の研究はまだ緒にたばかりであり、未開拓の部分を多く残している。本稿もその基礎的な一階梯にすぎない。そこで今後の研究の便宜を考え、「平家打聞」研究文献目録を付した。なお最近、四部合戦状本「平家物語」の研究においても、「平家打聞」に触れられることが多いが、本目録では一応「平家打聞」を主たる研究対象としたもの、または「平家打聞」という資料自体の性格に言及しているものに限ることにした。その旨、御了承願いたい。

○前回分の正誤表を末尾に掲げた。

平家打聞 第九卷

天下は、関白殿。水の為師は、国王に進らする事。天武天皇の時、大友王子に襲はれて御疲るに臨みたまひし時、臣下、水を取りて進らすれば、御疲れを息めて、御軍に勝れたまへば、是、祝ひなりとて、今も年始に先づ水を進らするなり。

四方拝は、国王、東に向かひて朝日を拝す、西に向かひて暮日を拝す、北に向かひて一字金輪を拝す、南に向かひて延命星を拝す。又云ふ、東方に向かひて伊勢太神宮を拝す、南方に向かひて男山石清水を拝す、西方に向かひて八幡を拝す、北方に向かひて北野を拝す。又云ふ、四方拝は、国王、四方七星を拝すなり。東方に向かひて角、亢、氐、房、心、尾、箕、此の七種を拝す、北方に向かひて斗、牛、女、虚、危、室、壁、此の七種を拝す、西方に向かひて奎、婁、胃、昴、畢、觜、參、此の七種を拝す、南方に向かひて井、鬼、柳、星、張、翼、軫、此の七種を拝す。又云ふ、東方に向かひて杓を以て、三度踏み事有り。是は万民、何に春の耕作に、身の苦しからましとて、其の苦を免れしむ。南方に向かひて面を暫時に振らず、維念有り。是は万民、夏の炎天に何に熱からんと思し食す御事にて、西方に向かひて笏を以て三度招く事有り。是は万民、秋の収めの時、鎌を以て茹らんに何に苦しからんと思し食す御事と知る。北方に向

かひて薄き御衣を召して、冬の時、万民何に寒からんと思し食す御事にて知る。此の時、国母亦系を三筋綺りたまふとなり。三筋を合はせて其の系を始をば外へ向け、百廿度綺りたまへり。三筋の系を綺り畢りて後に亦、三つ合はせて七十二度綺りたまふなり。此の三筋の系は、我と国王と万民と一つ心にて、一味同心に成らんと祈りたまふなり。一番に百廿度綺りたまふは、我も国王も万民も無病延命なれと祈るなり。其の系を後に宇治の宝蔵に収めらる。此の系を切れば、天下に災難出で来るなり。是のごとき事、十一月辰辰より、七日に三筋づつ、廿一筋系を綺りたまふなり。

天下―下―左6 水の為師―下―右3 四方拝―下―右4

①(山)による。(底)「延」。

鍔口とは、鎧の角々に辰の口の様な物を打ち付けて付けたるなり。今女院は、上西門女院。御堂関白の御娘なり。尚侍は、平城天皇に勸め奉り、軍を起こしし人なり。時に、大臣と号す。二条関白殿の御甥なり。

鍔口―下―五右5 今女院―該当項目なし 尚侍―下―七五左6

義孝少将は、一条摂政伊尹の三男。末世と雖も、思ひは五濁の汚れに染まずして、身、俗網ながら、心、精進菩提に用ゐて、生死流転を厭ひ、娑婆世界の無常を思ひ知る。常に「朝に紅顔在りて世路に誇れども、暮には白骨と成つて郊原に朽ちぬ。」と云ふ事を立

ち居に口付けて言ふなり。御伯父高光少将出家して、高武峰に昇き籠もり勤めたまふとの由を聞き、恨み弥事にして、朝夕申されける。爾らば、御父大政大臣と、天祿三年〔壬申〕十一月一日、御年四十九にして薨ると。而らば、弥、生死無常を思ひ知ると。卑しき者の鳩杖〔七十〕、鶴髮〔八十〕、縁山〔九十〕、夫男までも無常魔滅を爾こそ悲しむ習ひなれば、父大臣五十にだにも足らずして、盛りなりとも申すべき齡ぞかし。関白、撰録に撰政を兼ね、官位を大政大臣、従一位を極め、天子には御伯父。帝十一にして御即位〔田融院なり〕、十四にして御元服。未だ成長したまはず。東宮には花山院。御祖父。太子僅かに五歳と成る。三人の子息未だ昇進せず。一男惟賢は正二位下右兵衛佐。二男三男、拳賢義孝、共に少将。何に行くと末、心本無かりけむ。跡慕ひ歎くまでこそ老少不定なれ。誰か斯かる歎きの哀れの無かるべき。深山にも込もり、父の後生をも訪ひ、我が身の菩提をも浅からず願はんと覚しけれども、母、北の政所、大政大臣に後れぬれば、我さへ佐様も思ひ立ちなば、弥、歎きの重なる事、勞しく覺えて、心ならず。君に仕へて、出仕なれども、是有りけれども、中一年を過ぎて、天延二年〔甲戌〕九月、少将病の床に臥したまふ。則ち、胞瘡にてぞ有りける。太凡て、人為る事なれども、と思ひ成す程に、日数重なりて、名目ならず、大事に見えければ、母、北の方などの歎き理も過ぎたり。同じき十五日暮れ

つ方に物語に昇き話き言ふ。「義孝の身、人と生まれて生年廿一、家の面目、朝家の世の覚へ、世を恨み、人に恥づること、更に侍らず。朝夕恭しく喜びて過ごし侍りぬれば、村上女御、皇大臣宮安子、夷母にて御在せば、御外跡の一分なり。冷泉田融兩帝の御甥。東宮〔花山〕の御母、贈皇后宮は御姉にて侍れば、恐れながら、東宮の御伯父なり。関白堀河の兼通、東三兼家なれば、叔父に当たり、祖父九条右撰政、父大政大臣謙徳公に在す。母上氏明の親王の御娘にて御在せば、延喜の聖主の御孫なり。同じく人界に生を受くるとも、加様な家の面目なり。一門を忝なく争か侍るべき。然りと雖も、先世の事にや。小年より憂世を厭ひ、仏道に勤めんとて、志深くぞ侍りぬる。父隠れしとき、我さへ代に交はらず成りぬれば、母上弥歎きたまふとなり。御心を慙に兼ね奉り、加様にて過ぎ侍りぬるに、此の勞り、日に副へ重く成り侍るが、今は限りに覚へたまへけるに、今日をば世も過ごし侍らず、一定墓無く成るべき身なり。憂世の坂は兼ねて思ひ知りたる事なれば、我身命を絶へん事は思ひ切りたる事なり。老少不定は国の習ひ、力及ばず。高きも賤しきも皆此の恨み多し。之に付けても、仏道に勤め、後世にて同じ蓮に生まれ合はんとこそ思し食したり。」と申す。

義孝少将―下七六右一

①(山)「流転」による。(底)「流転」。

②(底)「未<sup>レ</sup>昇進<sup>ス</sup>」。

母上は、御返事も言はず、唯音を立ててぞ泣きたまひける。之を聞きける人、袖を垂<sup>らし</sup>ぬは一人も無かりけり。且く有りて少将、母上に申されけるは、「申し置き侍るべき事二つ侍る。一つは、義孝、今年の夏の初めより、法花経を自ら一千部読み奉りたまはんと願を發し、已に三百余部読み奉る。仍ち精進の此れ程に侍るに、此の願、空しく侍らん事の口惜しく侍るを、琰魔法皇、梵天帝尺に此の由を白して、設ひ定業なりとも、此の願を果たし侍る程に、娑婆世界へ返したまへと思ひ侍り。七日が程終はりたりとも、枕を動かさず(是一)。又琰魔王に申せども、終に叶はずして、墓無く成り了てば、今年、三歳に成る小者侍り。襦袢が中に已に父孤子と成る。其の末はと思ひ置き侍れば、何事をも申し尽くすべからず。母儀に先立つ前後相違の恨み、嬰兒を残し置く恩愛、父母の悲しみは何に為ん、何に為ん。但し、此の程、智者の語りたまひつるは、人の命と幸とは天地の助けに依る。天地の哀れを蒙るは、至孝に過ぎず。我が身年來是を意得<sup>コト</sup>ず。後悔千万千万。嬰兒若し患<sup>ウレ</sup>無く相成り長けて理をも知り、心も付き侍らば、孝養報恩を苦<sup>ナ</sup>ろに為よ。其の孤子の冥加と成るべし。教へ申し置きける由是なり。短命と申すも、人間の大きいなる恨み、父祖共に皆此の恨みあり。(祖)父九条右撰政〔九条殿師輔なり〕は天徳<sup>テン</sup>四天〔庚申〕五月五日、五十一にして薨

ると。父謙徳公は、天祿三年〔壬申〕十一月一日、四十九にして隠る。義孝の身又、今年天延二年〔壬戌〕九月が中に廿一にして墓無く成りなば、皆是寿と限りとを知る。嬰兒の苦しみは、至孝苦ろにして天地の哀れを頂かば、寿福を保つべし。」とぞ申し置きける。

之を聞き、母上の御歎き何ばかりぞ。喩へを取るに物ぞ無き。竟<sup>マ</sup>夜<sup>ノ</sup>ら、泣き明かしたまひける。人々<sup>ナゲ</sup>啗<sup>マ</sup>呼<sup>マ</sup>めたまひけるは、「理こそ是は仰せらるる事なれ。而ればとて、必ず墓無く成るべきに非ず。時に当たりにて、家毎門毎に此の勞り有り。而ればとて、皆死ぬる事か侍る。」<sup>ム</sup>挙<sup>ム</sup>賢<sup>ム</sup>少<sup>ム</sup>将<sup>ム</sup>殿<sup>ム</sup>も同じ時より臥したまへり。北の政所、是の御歎き有りと聞く。尤も心苦しく覺さるる事を聞きて申しければ、爾てこそ少し閑まりたまひけれ。是くて、其の夜も明けにけり。同十六日朝、御兄<sup>ミケ</sup>挙<sup>ム</sup>賢<sup>ム</sup>少<sup>ム</sup>将<sup>ム</sup>殿<sup>ム</sup>隠れたまひけり。御年廿五。母上を始め奉り、上下皆昇<sup>ツ</sup>き暗<sup>ク</sup>れて悲歎すること極まり無し。則ち、其の日の晩つ方に、御弟<sup>ミケ</sup>義<sup>ム</sup>孝<sup>ム</sup>少<sup>ム</sup>将<sup>ム</sup>も終てたまふ。御年廿一なり。一日の内、兄弟二人墓無く成りたまひける事、昔より為<sup>タ</sup>師<sup>ム</sup>無<sup>ク</sup>き事にこそ。爾るに先の少将、後の少将とて歎き有り。無常の為師と成る。母北の政所、御心も消えて、生きたる人にも御在さざりけり。其の間に、人々の御計らひにて、二人ながら、事取る態とは定めたまひければ、活くべく御在しけるが、生路に及ばざりけりとて、後に母上の夢に、いかばかりちぎりしものをわたり河かへりこぬまにわかれやはす

る

千度百度、恨めども、甲斐も無し。爾も其の後生、思ひ遣られて昇沈を歎き知る処に、小野宮の実資の大臣の御夢に妙に咄えたき花の影オシマに御しけるが、寤ウツにも語らひたまひける御中にて、平生の時も浅からずして、告げたまひけるかと歎せさせられけり、と云々。

(以上、担当水谷)

平家打聞 第十卷

九禁は、九重。九州は、筑紫九国。親強は、親は父母を謂ひ、族は一門を謂ふ。胡鳥は、胡国より来る雁音カガネ。九朝は、漢代に九度まで胡国を責めし事。一は、漢の中宗帝、漢の武帝の子。二は、漢の考元、中宗黄帝の孫子。三は、漢の惠帝、高祖の子。四は、漢の大<sup>①</sup>宗、高祖の弟。五は、漢の景帝の子。六は、漢の武帝。七は、漢の孝照、武帝の子。八は、漢の武陽帝。九は、漢の哀考帝。此の九つの朝として、御時九度まで胡国を責めたまひけり。蘇武が胡国へ越えしは元帝の御時。中都は、上林院の苑の事。花落は、王城。凡ては院の御在す故なり。花は王。王下り居たまふまで院と号する故、王下り、書きたまひては、花落と名づく。異家は、国々の武士。当家は、平家一門。幼帝は、先帝。母后は、建礼門院の女御。外戚は、先帝の御母方の一門。時忠、宗盛等の平家一門なり。外家は、先帝

の祖母。二位殿の事。

九禁―下九七左5 九州―下九七左6 親強―下九八右3 (親族) 胡鳥  
 一―下九八 右3 九朝―下九八右5 中都―下九八右5 花落―下九八右  
 6 異家―下九九左3 当家―下九九左3 幼帝―下一〇〇右2 母后―  
 下一〇〇右2 外戚―下一〇〇右3 外家―下一〇〇右3

① (山) による。(底)「第」。

漢上①に愁ひ有るは、漢上は、漢の元帝の事。臣下に愁ひ有りとは、蘇武が胡国に於て、臣下の歎く事。先は、蘇武が胡国に於て、十九年を経る事。配席は、北条郡蛭小嶋へ頼朝を流罪せし事。陳別は、天の責めを蒙りて、頭を陳ぬべしと云ふ事。殷王は、大甲。中高と号す。成陽王の孫。己巳即位。在位廿年。夏台トキに囚とらはるは、小乙王、悪王にして、六国を随ふる事。文王は、周康王の子。摩里モリに籠めらるは、人絶えたる荒野の名。迦葉尊者は、摩訶迦葉。四つの其の一なり。其の迦葉は、一は、摩訶迦葉、鷄足峰に籠りありし人。二は、優楼頻螺迦葉。三は、伽耶迦葉。四は、那提迦葉。是等なり。雪山鳥は、雪山の峯に住む寒苦鳥の事。無常を観ずる鳥。寒夜、寒君を被して、「夜明けければ、巢造らん。」と鳴く。日出でて後、世間温かに成れば、「今日の死なん日なるを知らず。死ぬるを知らずして巢を造るに何に。」と鳴く事ぞ有る。巢③を造る事を忘るる鳥なり。

漢上に愁ひ有る―下一〇〇右5 (見漢書上有愁) 先―下一〇〇左1 (先祖)  
 配席―下一〇一右5 陳別―下一〇一右5 殷王―下一〇七右6

夏台に囚る一下一〇七左一 文王一下一〇七左一 摩里に籠めらる一下一  
〇七左一(被籠羈里) 迦葉尊者一下一一五右4 雪山鳥一下一一五左3

①(山)による。(底)「漢土」。

②(山)「小乙王」による。(底)「小乙王。黒田氏翻刻「小己王」。

③(山)「菓造事」による。(底)「菓造事」。

御賀は、祝歌、集五十首の事。靈山淨土は、天竺に在り。弘法、密壇上に、須叟の間に、天竺仏性国へ行きて老翁に会へり。翁、弘法に合ひて語りけるは、「汝何なる志にて此処に來たるや。」と。「辺国に有りし時より、仏性国拜見の志有り。」と云々。翁、爾の時「而れば、此の山の案内をば、吉く知り侍り。御志忝く聞こえたまへば、翁処々の有様を見せ奉りて委しく教へ奉らん。」とて烈てぞ登りける。釈尊昔孝妃の爲に下乗退凡の六石率都婆二本を造立したまひしより一千余年の星霜累りて、諸行無常の文、既に霞に朽ちぬ。彼の率都婆の下に息みて、翁語りけるは、「此の二本の率都婆は、釈尊、栴檀甘露の御爲に、麓に立てたまふ。下乗の率都婆の、因と名づけけるは、母后の御爲なり。峯に立てたまふ退凡の率都婆は、果と名づけて、父王の御爲なり。故に、之を見る人々、孝養報恩の志を發せずと云ふこと無く、率都婆を作らざる念の人無きなり。」と。爾の時、大師哀れに思し食され、早本国へ帰り、二親の爲に之を行ふとぞ覺されける。大師問ひたまひけるは、「此の山へ登りけ

る道の程、遠近何ばかりや。」翁答へけるは、「昔は高く候へども、世も漸く末に成り行きければ、山漸々下りけり。昔俱留孫仏の時は四日四夜行きて山頂に至る。俱那含仏の時は三日三夜にて至る。迦葉仏、二日二夜。釈迦牟尼仏の時は、半日にて至る。」と。

御賀一下一二三左。靈山淨土一下一二三左。

①(山)「下乘」による。(底)「下乘」。

是に遙かに上りて見たまへば、古き石室大多有り。「嗚は何なる石室ぞ。」と。翁云はく、「彼は、昔五日支仏の住みたまひけるなり。而して如來在世の以前三ケ年に、淨居天子下り、告げて曰く、「却りて後二年有りて、仏、現はれたまふべし。」と。此の由を支仏聞き畢りて焼身入滅す。」と。「何なる故を以てか。」「世に二仏無く國に二生無し。一仏境界にして二尊号無し。故に此の山に五百石室有り。」峯に登り、大師翁に問ひたまひけるに、「如來入滅の後は、此の山には人も無きか。」と。翁、答へて曰はく、「凡そ前仏後仏、皆此の山に居す。仏滅の後には羅漢に住み、法滅には支仏住み、支仏無ければ、鬼神住することし。」と云々。翁尚答へて云はく、「此の山には多くの名有り。靈鷲山と名づけ、驚頭山と名づけ、狼跡山と名づけ、普山と名づけ、負重山と名づけ、仙人窟山と名づけ、恒に羅漢菩薩、得道及び神通の諸仏居する所にて有り。」と。翁又云はく、「山頂に五つの峰有り。各々精舎有り」と。指を差して次第に

語る。「一峰は裊姿羅跋拏と名づけ、並べるを薩多槃那と名づく。第三は、蛇神山と名づけ、第四峰は、小独刀山と名づけ、第五は是れを耆闍崛山と名づく。」と。是のごとく委しく語りて教へ、其の後、「此の翁は常に金色世界に在す。時々五台山に。」と語りて、然して隠れたまひてけり。当に此の翁は、文殊老翁と反作すと知るべし。

- ①(底)「仏可現」主此由」。  
 ②(山)による。(底)「耆闍崛山」。  
 ③(山)による。(底)「反作」。

爾の時、大師独り立ちて、静かに山の頂を見れば、聖跡の悲しみ、恋慕の念、千万重なり、如来在世の恋しさを語り合ふ人も無し。世尊説法の音の跡を望めば、師子の臥す処なり。聖衆烈席の古への跡を見れば、狼狐の栖①スミなり。谷も峰も、只鬱々たる林木にして、傍にも影にも偏へに籬々たる畢草、意に任せて滋るなり。思ひの住スミに群まれり。人も通はぬ深山の木の中なればなり。誰も聴聞しければ、正法の時はずこそ耻かりけん在世の、滅後は引き返たる哀れさ、只、生者必滅の悲しみを渡す。而れども、雲を分けて霞を分けて、遙々と尋ね詣りて、何をか念じ出すべき。海を越え山を越え、遠々と求め来て、点り返すこそ口惜しけれ。靈鷲山の峰に、釈尊在世の古へを詠じ慕へば、只、松風颯々として懐旧の袖に通ひ、耆闍崛山の麓

②に顧みて如来滅後の今を悲しめば、亦、暮雲片々として恋慕の涙を催す。責めても為ん方無ければ、法花経に付けても如来寿命品を思ひ連ねたまひけるは、釈尊の誠③に金言を諍ふ所以なり。经文の意に暗に誦したまひ、「新たに妙覚成りし仏には在らず。五百塵点過去久遠寿命無量阿僧祇劫常住不滅の古仏なり。」と。偈頌文を見るに「自我得仏来所経諸劫数無量百千万億載阿僧祇」と云々。此の文をぞ泣く泣く三返責めたまひける。

- ①(山)「栖」による。(底)「栖」。  
 ②(山)による。(底)「願」。  
 ③(底)「釈尊誠諍金言」。「誠諍」は「誠諦」のことか。(「法華経」如来寿命品第十六 冒頭参照)

爾の時、常在靈鷲山とて、何れも此の山に在す。令ひ顛倒の衆生は、近しと雖も而見えず。常に顛倒にて迷ふ故に、目前に在すと雖も見えたまはざりけり。「悲しきかな、哀れなるかな、願はくは恩徳広大の釈迦牟尼如来、弟子の誠志と随喜し、生身の妙身一度見せたまへ。」而して、五鉢地に投げ、山頂に向かひ、三返奉礼、拳頭合掌して山頂を瞻ミヤり奉りけり。靈峰の中④により、光明耀き、頂上を照らしたまふ。光中に化仏顕はれたまへり。金山王のごとし。即ち三界独尊に位す。四生礼有り。五百大願恩徳広大の釈迦牟尼無上大覚世尊、忝なくも三学、四菩薩、五根、六神通を内に備へ、三十二

平家打聞 第十一卷

相八十種好、外に顯はれたまへり。普賢、文殊、虚空藏、薬王、勇施、淨行、無辺等、八万恒沙の諸大菩薩等の前後に、舍利弗、迦葉、目連、須菩提、富樓那、阿難、阿泥盧頭等、万徳無数の諸大声聞、左右に烈なりて、物じて靈山会上の集会、發起影向す。当に機縁を結ぶべし。四衆、皆悉く釈尊に伴ひ奉る。天、四種の花を雨らし、地には六種震動す。爾の時、大師、信仰の身の毛竝立ち、歎喜の涙を雨らす。長跪合掌して、尊顔を瞻り奉る。時に、世尊、青蓮の御眼鮮やかに、丹果の唇嚴かにして、大弁の迦陵の御声を出して説き言ひけるは、「我智力如是、恵光照無量。」と云々。而して、四天王袖を引きて送りましたまへり。本の路にと申し食しければ、本の道場に還り来たりて、驚き覚めたまひてけり。誠に一乗妙典の功德深広なり。

① (底) 「長跪」。

② (山) 「出」による。(底) 「出」。

③ (山) 「説言」による。(底) 「説言」。

節下は、時の職の上郎。阿苦は、時の成敗。源氏大将は、延喜の太子。高明(マコト)新王是なり。

節下―下 一四三左<sup>2</sup> 阿苦―下 一四三左<sup>5</sup> 源氏大将―下 一四四右<sup>5</sup>

(以上、担当字野)

石清水は、男山八幡宮。住吉は、鵜羽尊不合尊。諏訪は、天曆の御特殊に弘まりましたまへり。上宮は普賢、下宮は千手観音なり。雲上は、内裏。主上渡らせたまふ御殿なり。竜は、先帝。人間の上なれば竜に喩へ、万人の頂を踐みたまへば雲上と云ふ。竜は雲上に住むなり。海底は、先帝安徳天皇御身を海に投ぐる事。波の下なれば魚に喩ふるなり。

石清水―下 一四九右<sup>1</sup> 住吉―下 一七〇左<sup>3</sup> 諏訪―下 一七一右<sup>4</sup> (諏

方) 雲上―下 一七七左<sup>6</sup> 竜―下 一七七左<sup>6</sup> 海底―下 一七七左<sup>6</sup>

欲入日洗は、先帝を日に喩ふ。行幸し、西国に在ししかば、日の入る方なれば、入日とは云ふ。終に崩御したまへば、入日に喩ふ。

洋律白波は、凶徒等の名。本より恣人(マコト)を洋律白波と云ふ。日本紀に在り。大気無(オホキ)き心有れば、爾云ふなり。

欲入日洗・洋律白波―該当項目なし。ただし早川厚一氏の御指摘のように「平家打聞」と「四部合戦状本平家物語」名古屋学院大学論集24―2 昭63・10)、四部本下一七八右3の空白部に入る実定の歌が「新古今集」

35、「なごのうみのかすみのまよりのながむればいる日をあらふおきつらなみ」と同歌ならば、その注に該当する。

珍重は、花やかなる色事を替ふ。帥内侍は、中山中納言の娘、平



大納言の北の方なり。大納言内侍は、五条大納言邦綱入道の娘、本三位中将重衡卿の北の方なり。普賢寺殿は、清盛入道の次男、八嶋の大臣殿なり。北政所は、右大臣為隆卿の娘。天行は、天変。北天は、中天。三災は、一は兵乱闘諍口等。二は疾病。天下に疫病起こりて人民の失する事なり。三は飢渴。飯に飢ゑたるを飢と云ひ、水に飢ゑたるを渴と云ふ。是、刀疾飢の三災と云ふなり。

珍重 下一七八右4 帥内侍 下一七八右6 大納言内侍 下一七八右6  
普賢寺殿 下一七九右1 北政所 下一七九右1 天行 下一八六右1  
北天 該当項目なし。三災 下一八六右2

①(山)による。(底)「偏」。

七難は、日月度を失し、時節反逆す。或ひは赤日出づること三三四五日出づ。或ひは日蝕、月蝕して光無し。或ひは日輪の一重なると、二三四五重の輪現る。是を第一難と為す。廿八宿度を失し、金星、輪星、鬼星、火星、水星、風星、刀星、南斗、北斗、五鎮の大星、一切国の主星、三公星、百官星、是くのごとき諸星各々変現す。是を第二難と為すなり。大火、国を焼き、万姓を焼き尽くす。或ひは鬼火、竜火、天火、山神火、人火、樹木火、賊火、是くのごとくぞ変恠する。是を第三難と為すなり。大水の、百姓を漂没して時節返逆し、冬の雨、夏の雪、冬の時の雷電礮礮、六月に氷、霜、雹雨り、赤水、青水、黒水雨り、石、礫石雨る。江河逆流し、山を浮か

べ、石を流す。是くのごとき変時を名づけて第四難と為すなり。大風吹き、万姓を殺す。国土、山河、樹木一時に滅没す。時に非ずして大風、黒風、赤風、青風、天風、地風、火風、水風あり。是くのごとく変する時を第五難と名づくるなり。天地、国土兌陽し、炎火洞然として百草凡旱して五穀成らず。土地赫然として万姓滅尽す。是くのごとき時を第六難と名づくるなり。四方より賊来たりて国を侵す。内外に賊起こる。火賊、水賊、風賊、鬼賊ありて、百姓荒乱し、刀兵劫起こる。是くのごとき恠時を名づけて第七難と為すなり。

七難 下一八七右2

①(山)による。(底)「及逆」。②「仁王経」「霹靂」。③④⑤(山)による。(底)「西」。⑥「仁王経」「九陽」。⑦「仁王経」「九旱」。

重花は、舜王。院方は、国母の時の名。国母とは太子即位後の名。太子御在さざる程をば、中宮と名づくるなり。

重花 下一八六左1 院方 該当項目なし。

①(山)「不御在」による。(底)「不、御在」。

②(山)「程」による。(底)「程」。

(以上、担当谷村)

### 平家打聞 第十二卷

法勝寺は、白河院の御建立。仏閣は、御堂。皇居は、内裏。人家

は、公卿殿上人已下、諸大夫までを云ふなり。文徳天皇は、仁明の太子。(庚子)即位。在位八年。前朱雀院は、延喜の太子。握は、安き倉。国王常に居まして見物せられたまへり。三台は、公なり。参儀は、国王の御身間近にして、朝夕に供御を進らする。

法勝寺―下二〇右1 仏閣―下二〇右2 皇居―下二〇右2 人家

―下二〇右3 文徳天皇―下二一左3 前朱雀院―下二一左4 握

―下二一左6(榎) 三台―下二六右5 参儀―下二六右5

①(山)「諸大夫」による。(底)「諸大夫」。

北野天神は、最初天慶五年(壬寅)七月十二日右京七条の二の坊十三の町に於いて多治比奇子に於いて託す。御託宣に云はく、「我、昔世に在りし時、<sup>①</sup>慶右近の馬場に遊覧するに、之に因りて虚横の楯に遇ひて、鎮西に左遷せらる。後、遠く宿報を思ふと雖も、中心に恨みを結ぶの報、返りて肝を焦すの火を作る。帰京の期、得ること無し。既に、天神の号を得たり。鎮国の念有り。」と。

①(北)「慶遊」覽右近馬場、多年、城邊閑勝之地、何如彼場哉、因レ茲遇ニ虚任之禍」。

右大臣兼右近衛大将、正二位を贈らる。菅原卿は、左京大夫従三位清公<sup>①</sup>朝臣卿、参儀従三位刑部卿兼近江権守是善卿の第三子。母は、伴氏<sup>とも</sup>。十一にして始めて詩を云ひ、逐に属文を工す。博は百家を貫す。清和の御時、貞観四年、父の帝生まれました。時に年の十八にし

て、早く下野権少丞に任ずることを為すを以て、十二年の春、小内記に到る。都良香が亭にて、門生の弓躬の戯に遇ふ。都良香別け入<sup>④</sup>れて誠<sup>まこと</sup>に之を射さしむ。大臣二つ拵<sup>たは</sup>けて、二つ中る。良香之を見て云はく、「射策<sup>⑤</sup>鵠<sup>こ</sup>に中る驗なり。」と。其の後、幾ばくもせずして、<sup>⑥</sup>对策に及ぶ。第十三年二月亥番助に任ず。小内記に遷る。十四年存門渤海客の使に為したり。母の憂ひ下りて、使職<sup>⑦</sup>に停む。十六年の正月、従五位下に叙して兵部少輔に任ず。民部少輔に遷る。陽成院の御時、元慶元年式部少輔に為したり。二年の正月、門頭<sup>⑧</sup>を越えたり。都良香従五位上に叙す。累代の儒胤を以て、月余に文章博士、加賀権守を兼ねたり。十一月、巨勢文雄に代はるまでは、後漢書を講ず。八年、親喪<sup>⑩</sup>して斛職<sup>こくしやく</sup>。詔して本官を以て之を起こす。光仁天皇の御時、讃岐守に為す。三年、正五位下に進ず。宇多院の御時、寛平二年、初めて昇殿す。左大弁を兼ねたり。四年、従四位下を授く。右京大夫に遷る。勅<sup>⑫</sup>を承りて、清凉殿に侍す。

北野天神―下二四右3

①(北)「清公朝臣孫」。

②(山)「工属文」による。(底)「工属父」。(北)「工属文」。

③(山)「為父帝生」による。(底)「為父帝生」。(北)「為文章生」。

④(北)「引入令ニ試射ニ之」。

⑤(山)「鵠」による。(底)「鵠」。

⑥(北)「对策及第」。

⑦(底)「為存門」渤海客使」。

⑧(北)「丁」母憂」。

⑨(北)「越」門頭都良香「敍」從五位上」。

⑩(北)「解」職」。

⑪(山)による。(底)「本官」。

⑫(北)「奉」勅清凉殿侍「讀」群書治要」。

本院大臣は、<sup>①</sup>大仲臣鎌子の連子と云ひし人は、天津兎屋根尊の金鷲に乗りて天下りたまひける時、銀鶴に乗りて御友に侍りける其の未なり。神代の始めより十二代とかや、と。鎌子は人王十七代孝徳天皇の御時、様々の大臣達を定めしに、内大臣の初めを承れば、三十九代天智天皇治天の御時、始めて藤原姓を賜る。天氣、殊に目出たく、帝王の難を除く人に有りぬと思し食すをば、様々に時日を起こすて故なり。藤氏の最初は鎌足の内大臣なり。今に多くの帝の後、大臣公卿は方々の藤氏末々の枝葉にて、一州に<sup>②</sup>進りたまへり。抑、此の鎌足は叢祠の露の底に於いて受けて、榮を百歳雲上に得たり。此の人は三十二にして大臣に成り、内大臣の位に<sup>③</sup>廿、<sup>④</sup>五十六にして覺じたまひぬ。

本院大臣「下」二四四右<sup>2</sup>

- ①(神)「大仲臣」鎌足「村」子云人」。
- ②(神)「帝王」殊有難思食」。
- ③(神)「様々」政、為民、廣遠也」。
- ④(神)「生叢祠」露底受」。

- ⑤(底)「得榮」百歳雲上」。(神)「榮百歳雲」上得」。
- ⑥(神)「廿五年」。

(以上、担当岩名)

おわりに

今回をもって、訓読『平家打聞』は完結する。第一回「はじめにも記したように、あくまでも試訓であるので、まだまだ問題を残している箇所も多い。引き続き大方の御教示をお願いしたい。

本稿は、とりあえず訓読本文を提示することを主たる目的としている。したがって、内容に関する「注釈」はほとんど示し得なかつた。そこで、訓読の完結に際し、今回の作業でいささか気づいた点を、メモ程度のかたちではあるが、以下に記しておきたい。むしろさらなる検討は今後の課題である。

○卷一「五台山」注 法照禪師のことは、「私聚百因縁集」以外にも、『登山状』(『大聖竹林寺記』を引用する)をはじめとして、『当麻曼陀羅疏』卷三十六「普賢菩薩事」、『観経厭欣鈔』卷上之本、『十王讚嘆鈔』上等にも見えている。『宋高僧伝』、『仏祖統紀』などに収める伝記がその源泉であらう。

○巻四「賀茂」注 この注は、実質的には神功皇后の事蹟の叙述を中心とする。これは八幡縁起の中でも、香椎宮縁起と重なる内容をもっている。『八幡宮巡拝記』上に収める香椎宮縁起と比較すると、

順序の前後はあるが近似した叙述が認められる。この注をはじめ、巻五「八幡大菩薩」注、巻七「男山」注、巻八「宇佐宮」注など、八幡縁起を含む注が多く見えるのは注目すべき現象である。そもそも、この注の初めに「応神天王御誕生より、石清水男山の御身に至るまで、粗、是を考へ申すべし」とあった。まさに『平家打聞』の中には、応神の誕生（巻四「賀茂」注）から、宇佐への出現（巻七「男山」注、巻八「宇佐宮」注）、男山への鎮座（巻七「男山」注）までの縁起が、それぞれかなりの量をさいて記されているのである。

○巻六「慈恵大師」注 この注に含まれる座主補任説話は『言泉集』所収「祐範僧都説法草」と近似する。谷村 茂『平家打聞』巻六の慈恵説話について——『言泉集』『私聚百因縁集』との比較から——（本誌34号所載）参照。

○巻七「男山」注 石清水八幡の縁起は『石清水八幡宮護国寺略記』（石清水八幡宮蔵「諸縁起」所収）などが存するが、本注の記事と全面的に一致するわけではない。一方で、本注には『転法輪鈔』、『澄憲作文集』、『八幡講式』等に見える対句的表現（「開城王子般若を写して黄金を夢の中に於て賜はり、伝教大師法花を講じて

紫の袈裟を眼前に於て授けらる……」）も含まれている。さらに大隅正八幡縁起と宇佐宮の縁起を付け加えていることもあわせて、『平家打聞』編者の八幡神への関心の大きさをうかがわせる。

○巻十「靈山浄土」注 弘法大師空海が入唐のついでに渡天までして靈鷲山に詣でるといふ、一見荒唐無稽の内容であるが、この話柄は、フリア美術館蔵『弘法大師伝絵巻』上、『高野大師行状図画』、『高野山秘記』等に見えるものである（舞曲「笛の巻」とも関連）。

○巻十一「七難」注 『仁王般若波羅蜜經』受持品第七に収める七難の記述に拠るものと思われる。

（稲田）

『平家打聞』研究文献目録

・高橋貞一「四部合戦状本と平家打聞」『仏教大学人文学論集』4  
一九七〇・九

（『続平家物語諸本の研究』思文閣出版 一九七九 に再録）

・高橋伸幸「四部合戦状本平家物語」の「裏書」——「刀後聞」と「平家伝抄」——『日本文学論究』29 一九七〇・一一

・信太 周「平家打聞」覚え書き——四部合戦状本平家物語書説をめぐって——『大妻国文』5 一九七四・三

・高橋伸幸「四部合戦状本平家物語」に存する合点の意味——

『平家打聞』との関係を廻つて——』『国語国文』45—8 一九七六・八

。黒田 彰「島原松平本『平家打聞』」「日本文学説林」(島津忠夫監修、矢野貫一・長友千代治編) 一九八六・九

。黒田 彰「島原松平本『平家打聞』」(影印・上) 関西大学『国文学』63 一九八六・一〇

。黒田 彰「神道集、真名本曾我と平家打聞」『愛知県立大学文学部編集(国文学科編)』35 一九八七・二

(「中世説話の文学史的環境」和泉書院 一九八八 に再録)

。黒田 彰「島原松平本『平家打聞』」(影印・下) 』『愛知県立大学文学部編集(国文学科編)』36 一九八八・二

。村上 学「平家打聞をめぐつて——回顧と展望——」『神道大系月報』72 一九八八・二

。高橋伸幸「神道集」本文筆録年次に関する問題——『平家打聞』との関係を廻つて——』『神道大系月報』72 一九八八・二

。早川厚一「『平家打聞』と『四部合戦状本平家物語』」『名古屋学院大学論集』24—2 一九八八・一〇

。谷村 茂「『平家打聞』卷六の慈悲説話について——『言泉集』『私聚百因縁集』との比較から——」『同志社国文学』34 一九九

一・三三

。佐伯真一「『平家打聞』と古今集注釈——『玉泉坊』と『人丸本』——」『日本古典の眺望』(吉井 敏先生古稀記念論集刊行会編) 一九九一・五

訓読『平家打聞』(三)(卷五・卷六・卷七・卷八) 正誤表

頁	上下	行	誤	正
四八	上	4	(山)「賜ル」による。 底本	(山)による。
五七	上	5	(山)による。	(山)「賜ル」による。
六二	下	7	平家打聞第六卷	平家打聞 第六卷
		16	平家打聞第七卷	平家打聞 第七卷